俳諧七部集　下

# 崇儀序

出家遁世の孤雲聖徳利生ら八常に苦薩の行に約
ひとりの心を心とし泉をくみ石をたて十ひのうなな
の文字の野風をたけしうつ巣を掃ひ出家おこれ
居せる家あの二三子席を付て小柄くけ出家おこれ
庵主これかはをかけ宋人のの毒ら毒ら
なんとあのわ男を糖のさ為なるを堅をおき抜を
おとりて金屋の底の吉きを宋おりとおりとおりとおり
いつる洋のこうう身が入うさくもうつうのわうの
こものこが蛇のすくるけ為やられを思ひ立春の日の
ひつこ出ようう秋の月をか宗れをいかやや此後う
籠なりて意をあのうちに二年よううつかんはを
ひとぎみるが宵洋の法戒あやうり おきひれいは又
うぬき炭の助をくうけこくも題号を為を付ける
ハ海の雪を戒かいこう文の為るいうふやを炭の米この
多くひうくあるねく倒ひはよるせうるふもいうれ鶴ホ
ようの所あうつ支なりしひ自為業の青途ホやう
かはちる紙を為て再ふの期を為うう出ホひ集出
うのかひてあのあるの秋きり火猫ひのこホうう
くおき炭のふる哥をうちもーつうう出炭ふを
ひとは部くうこ種おちるを小な間をうてうと思ひ

からびや此集をえらぶ時と成て此名を宜しく
序書そへよと云捨て出ぬる人を見送て初
杉のふる題号をうつしかけつるに兵をつくす墟
かハらのしかとぞしるしつゝむ

元禄七乃年 夏閏五月初三日 素龍書

むめが香にのつと日の出る山路かな 芭蕉
処々に雉子の啼たつ 野坡
家普請を春のてすきにとり付て 仝
上のたよりにあがる米の直 芭蕉
宵の内はらはらとせし月の雲 仝
藪越はなすあきのさびしき 野坡
御頭へ菊もらはるゝめいわくさ 仝
娘を堅う人にあはせぬ 芭蕉
奈良がよひおなじつらなる細基手 野坡
ことしは雨のふらぬ六月 芭蕉
預けたるみそとりにやる向河岸 野坡
ひたといひ出すお袋の事 芭蕉
終宵尼の持病を押へける 野坡
こんにやくばかりのこる名月 芭蕉



初雁に乗懸下地敷て見る 野坡
露を相手に居合ひとぬき 芭蕉
町衆のつらりと酔て花の陰 野坡
門で押るゝ壬生の念仏 芭蕉
東風々に糞のいきれを吹まはし 仝
たゞ居るまゝに肱わづらふ 野坡
江戸の左右むかひの亭主登られて 芭蕉
こちにもいれどから臼をかす 野坡
方々に十夜の内のかねの音 芭蕉
桐の木高く月さゆる也 野坡
門しめてだまつて寝たる面白さ 芭蕉
ひろふた金で表がへする 野坡
はつ午に女房のおやご振舞て 芭蕉
又このはるも済ぬ牢人 野坡
法印の湯治を送る花ざかり 芭蕉
なはてを下りて青麦の出来 野坡
ウ
どの家も東の方に窓をあけ 野坡
魚に喰あくはまの雑水 芭蕉
千鳥啼一夜〳〵に寒うなり 野坡
未進の高のはてぬ算用 芭蕉
隣へも知らせず嫁をつれて来て 野坡
屏風の陰にみゆるくはし盆 芭蕉

三吟

菜好も蕋織りけり　花さくら　嵐雪

ひなぎくや苣ホ花　鶏頭ある　利牛

戸乃人まゝ乃小坂のうとまりて　胡牛

外をとまゝ〳〵ホ聞ふ新樓場　嵐雪

細〳〵と鞠日ある乃中月　利牛

早稲も晩稲も　ホ生に出る　胡牛

ウ　江深を　嵐雪

あちあちもれば蓋の　利牛

陰ゝ　胡牛

てゝ〳〵〳〵〳〵　嵐雪

窓公　利牛

入百のかけを　胡牛

細好きの　嵐雪

人のまゝ　利牛

難役の　胡牛

坂の中なる　嵐雪

閑と　利牛

窮に見て　胡牛

ウ　寄ゝ〳〵ホ支頭ゝ　嵐雪

抱捏ゝ　利牛

〳〵〳〵と　胡牛

ひ見ふ　嵐雪

塔ゝ　利牛

ゝ〳〵の　胡牛

金仏乃　嵐雪

仏ゝ　利牛

森乃　胡牛

ゝ場乃　嵐雪

中ハ　利牛

ゝホ　胡牛

ウ　東ゝ　嵐雪

ゝと　利牛

鎌倉乃　胡牛

ゝと　嵐雪

独ゝ　利牛

ゝ　胡牛

婦ら川くまつゝて

空豆の花さきにけり麦の縁　孤屋

昼の水鶏のはしる溝川　芭蕉

上はりを通さぬほどの雨ふりて　岱水

そつとのぞけハ酒の最中　利牛

寝所に誰もねて居ぬ宵の月　芭蕉

どたりと塀のころぶ秋風　孤屋

ウ

きりぎりす薪の下より鳴出して　利牛

晩の仕事の工夫するなり　岱水

妹をよい所からもらはるゝ　孤屋

僧都のもとへまづ文をやる　芭蕉

風細う夜明がらすの啼わたり　岱水

家のながれたあとを見に行　利牛

鯲汁わかい者よりよくなりて　芭蕉

茶の買置をさげて売出す　孤屋

この春ハどうやら花の静なる　利牛

かれし柳を今にをしみて　岱水

雪の跡吹はがしたる朧月　孤屋

ふとん丸げてものおもひ居る　芭蕉

名

不届な隣と中のわるうなり　岱水

はつち坊主を上へあがらす　利牛

泣事のひそかに出来し浅ぢふに　芭蕉

置わすれたるかねを尋ぬる　孤屋

着のまゝにすくんでねれば汗をかき　利牛

客を送りて提る燭台　岱水

今のまに雪の厚さを指てみる　孤屋

年貢すんだとほめられにけり　芭蕉

息災に祖父のしらがのめでたさよ　岱水

堪忍ならぬ七夕の照り　利牛

名月のまに合せ度芋畑　芭蕉

すたすたいふて荷ふ落鮎　孤屋

ウ

このころハ宿の通りもうすらさむ　利牛

山の根際の鉦かすかなり　岱水

よこ雲にそよそよ風の吹出す　孤屋

晒の上にひばり囀る　利牛

花見にと女子ばかりがつれ立て　芭蕉

余のくろまで芝はめんかく　岱水

芭蕉　孤屋　岱水　利牛

各九句

百韻

あふ深川父はてまて里番船　真白ふさく　利牛
雲のいそぐの　孤屋
兩河ゝ孫殺無慈の時雨して　利牛
夕力町ゝ　もしか　西ゝ勢　飛帆
竿竹ふ茶を乃紳ゝゝゝゝせ　孤屋
ゝゝ蹄ゝそ　つゝゝ　人聲　飛帆
墓の月　干ふ茶乃拙汁ゝゝ　孤屋
拂ハ跡ゝ　擂　ちれゝ　利牛
ウ
ぢゝめき元手ふゝゝ手ふゝゝ　飛帆
坊ゝふ　ゝゝ　ゝとゝ　孤屋
松坂や　矢川へ　ゝゝ　仁平氏　利牛
吹ゝ　勝も　ゝ　ゝ　ゝ通ゝ　飛帆
十二ゝ兵の衣裳乃ゝゝゝ　孤屋
本堂ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　利牛
日乃ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　飛帆



ゝゝと二日炎乃ゝゝ　孤屋
ゝゝゝゝゝゝ　ゝ　ゝ　利牛
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　飛帆
兼明ゝ　ゝ　ゝ　孤屋
眼ゝふ西ふ武士乃ゝゝ　利牛
尚きゝゝ　ゝ　今貝ハ大　飛帆
切堤の　食傾ゝ　孤屋
くゝゝ　彼ゝを　仕込　利牛
癡日をゝゝゝ　飛帆
殺てゝゝゝ　孤屋
ゝゝ　ゝ　ゝ　利牛
ゝゝゝの雲乃ゝ　飛帆
ゝゝ乃月　孤屋
ゝゝゝゝ　利牛
ゝゝゝゝ　飛帆
ゝゝゝゝ　孤屋
伐　遠ゝ　利牛
ゝゝ　ゝ　飛帆
ゝゝ　ゝ　孤屋
ゝゝ　ゝ　利牛
ゝゝ　飛帆
ゝゝ　孤屋
ゝゝ　利牛
ゝゝ　飛帆
ゝゝ　孤屋

むく起うして　余ら　親しき
燃あるる篝を　焚ホ　利牛
十四人　夜の　あうまり　孤瓦
月花ホかきりけ　城の跡さう　利牛
弦　寺　海　雲　ゝ　孤瓦
機嫌　ゝ　ハ　度　孤カ　ゝ　孤瓦
小　ホ　ホ　空　解　利牛
掾　空　ケ　出　孤瓦
端　ケ　入　見　利牛
麦　烟　ハ　ハ　孤瓦
物　ホ　ホ　政　利牛
又　ホ　ホ　孤瓦
波　ホ　ホ　利牛
ホ　ホ　ホ　孤瓦
蔭　ホ　ホ　利牛
一　ホ　ホ　孤瓦
鉞　ホ　ホ　利牛
ホ　ホ　ホ　孤瓦
ホ　ホ　ホ　利牛
又　ホ　ホ　孤瓦
ホ　ホ　ホ　利牛
入　ホ　ホ　孤瓦

きちうのよ　ホ　絵　絵　四　川　利牛
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　孤瓦
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　利牛
水　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　孤瓦
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　利牛
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　孤瓦
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　利牛
入　船　ホ　ホ　月　の　六　月　利牛
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　孤瓦
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　利牛
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　孤瓦
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　利牛
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　孤瓦
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　利牛
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　孤瓦
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　利牛
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　孤瓦
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　利牛
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　孤瓦
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　利牛
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　孤瓦
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　利牛
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　孤瓦
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　利牛
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　孤瓦
ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　ホ　利牛

包て寒う鮭の　孤屋　利牛
多宮先を今年は風よ欲あるく　非俊
うまや　仕るもかくれおろ　孤屋
暑病忘弥生廿月をうさう　利牛
銭月ふうてあれうる　遊坂　孤屋
城も主男服裕五の主お摩じ　非俊
門迷雪を　町　の　相浦　孤屋
彼岸を一　辛乃　花の咲を　非俊
三人かうう　おりろ　文　玄　孤筆

## 春之部　歳旬

立春

蓬莱や　竹や　伊勢の　初夜　芭蕉
東雲や　生れ　よ　ちとせ　ひさう　松　濁子
みちのくの　乃け　の　雪　越　人　筆の　海老
春や　夜の　丹波乃　庫　も　ほ　と　去来
力さん　佛　もつ　ま　と　し　六　乃　の　ま　杉風
いそ　き　ま　ば　者　乃　か　き　く　う　ま　孫　正　秀
答　は　や　ま　る　乃　ま　い　ひ　ま　代　の　春　西堂
猫　の　き　ま　門　徒　坊　さ　の　の　ま　ば　信　山
国　乃　も　中　乃　河　や　年　は　河　宜　沾圓
初日　松　赤　莖　辛　も　つ　ま　れ　メ　や　孤屋
も　赤　る　親　雪　多　ち　ま　る　れ　若　ま　ば　利牛
非俊

梅

梅　一　ま　つ　ま　く　草　乃　あ　う　花　露沾
ま　う　や　白　の　梅　ま　の　よ　き　ま　う　曲窓
む　ま　う　考　は　は　助　く　喜　る　初　ば　支考
空　の　う　ち　を　見　ま　み　て
心　矢　ち　や　東　雲　光　の　月　の　月　の　ば　土芳
梅　や　く　湯　屋　の　ま　梅　な　り　う　む　矢　の　花　利牛
赤　み　さ　の　ま　を　明　る　む　矢　の　花　游刀
み　み　ま　ま　ま　ま　れ　と　春　の　花　非俊
紅　梅　い　娘　ま　み　ま　る　妻　ま　う　ば　杉風
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
七　く　ま　や　梅　い　ま　ま　け　て　ま　き　ま　非角
う　ち　ま　ま　て　ま　梅　ま　ま　け　て　ま　き　ま　非俊
仙狀
海　う　の　文　の　く　し　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
脇　月　一　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
大　ま　ま　や　梅　乃　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
お　ま　ま　月　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
太来　信　文草　仙花
徐川乃香
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
十　ま　日　ま　梅　月　の　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
梅　ま　恵　初　ま　う　梅　て　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
利牛　春色　孤屋　非俊　非角

鶯

うくひすやあちこちとする小家かち　嵐雪

鶯に薬をしへん聲の文　其角

うくひすの聲に起行雀かな　桃隣

鶯や門はたまたま豆腐賣　野坡

宿かりの一聲も念を入る　利牛

柳

あれ程もつらし棒一本柳かな　沾圃

遠目にも一目のかなひとき柳かな　素龍

又人ふちとりて歩かるや柳かな　野坡

甘き粕乃尾ハ見世さる柳かな　一風

町中へ歩かる宿の柳かな　利牛

傘に押わけ見たる柳かな　芭蕉

椿

大さらの饅頭よちり込椿かな　孤屋

枝もろく倦らぬ咲き椿かな　湖春

念入て咲らつむ椿かな　曲翠

浪にかくれみせて花咲椿　嵐青

鳥乃音も聡は家持乃赤椿　支考

大き棒除去てから椿散りけり　野坡

花

うへ乃く花見まゐりて待かな

華まさりためでたさ小さきかな



なかなかにけるさくらの桜さけきさかりにて

罔あきさ乃そろはぬ花見仕舞かな　芭蕉

ちらくや内て花見のそつわら　杉風

うつくしや来て八花見の留守寂
行かぬはなの後家花見にも待りて　丈草

中々も宿お鎮乃花見かな　素龍

花守や白きかしらを突あはせ　去来

銘々に陽を待様や庭乃花　孤屋

おもふさまに花見乃宵の外さかな　斜嶺

なり直てもあたらしき花見かな　沾圃

柿乃若葉花より雪や花の枝　小枝

牡丹さく人のや花見ときさかり　湖春

何となう空は花みの戒のさかりかな　其角

花よりも毛虫くなし家桜　嵐青

山さくらちるや小川の水車　大津尼 智月

老僧も葉かくれする花見かな　大坂 之道

説女を花に殺さるる遅桜　祐甫

山桜小門あさきおそなくちり　仝

昼中や花に蟲の湧く涼むさ　利牛

おちつきは鼻やさむさや桜かな　仝

杉見えるまゝふくや春所　孤屋

紫の花そ日なくて花見かな　野坡

今日の時分はかならずや山桜　仝

上巳

[illegible] 桃の花　治徳
[illegible] 桃の花　桃隠
[illegible] 桃の花　其角
[illegible] 桃の花　如行
[illegible] 桃の花　牧童
[illegible] 桃の花　利牛
[illegible] 桃の花　孤屋
[illegible] 桃の花　芭蕉

[illegible]　有
[illegible]　芭蕉
[illegible]　子珊
[illegible]　蚊淫
[illegible]　猿雖
[illegible]　仙菫
[illegible]　牧童
[illegible]　利牛

夏部之歳旬

首夏

[illegible]　嵐雪
[illegible]　牧童
[illegible]　九皐
[illegible]　雪芝
[illegible]　子珊
[illegible]　利牛

卯の家

[illegible]　芭蕉
[illegible]　杏来

旅行

[illegible]　許六
[illegible]　支考

[illegible]　沐玄
[illegible]　素堂
[illegible]　芭蕉

[illegible]　桃儀
[illegible]　其角
[illegible]　嵐雪
[illegible]　杉風
[illegible]　芭蕉

まを手をやなえしやうきに　素堂
吹ちまりく風の　西ふかれ　利牛
ふ組頭乃ぬされぬ　檜みか　肥後

麦

精舎にまを種のやしやの麦の穂と共ゝ　荆口
麦の穂と共ゝ　千川
麦跡や田植やおそき常しき　許六
翁乃旅行を川さかをとをりて
刈ちゝ麦のあわひや夜の月　利牛

ちすゝ　吹かゝ

麦畑や知ぬ人ても猶ゝの牛　肥後
ちすゝ　ちゝを
浦風やむかふ　堤乃ちあれきハ　岱水

端午

みすゝ雨や金幣ゝ付ら少ゝ形　其角
さらふをてみくやさうの風ゝ　洒堂
ゝ日まてゝあをゝかゝ　桃隣
又もなくゝ上ゝ　粽　又把　嵐雪
ゝをのゝハ貴ゝ　仙花
悔ゝ乃下ぬき金ら　拾ら　素龍

夏旅

ゝら松をみゝけて町乃ゝ　卧高
枯ゝ木ゝ　斜嶺
二三ゝ　鶯町

猿蓑　芭蕉

ゝけ山ゝ力乃ゝ
ゝ山ゝ
ゝ乃ハ
ゝ乃ハ
ゝ乃ハ

五月雨

ゝゝ雨ゝ
ゝ雨ゝ
ゝ雨ゝ
ゝ雨ゝ
ゝ雨ゝ

素龍　桃隣　肥後　洒堂

涼

川中ゝ　根ゝ
月ゝ
涼ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

芭蕉　女　知七　探芝　智月　凡峯　去来　肥後　素堂

三ゝ月乃隠ゝ

題ゝ

橋ゝ　宮ゝ　机乃　杉風
賢斗ゝ　ゝ　ゝ　正秀

世の中や年貢畠のけしの花　里東
ふる文ふ人てとくる　葉明　嵐雪

水雪路あて

山吹も巴も出る　田植うた　汴六
ひら白や雨降るふぬ花の名　智月
走山や人もすきの数　北鯉
晩のめをさまさぬよ千の花　乙州
雨乞の雨来ふるかくれ水　文州
常々雨の夕や　葵　仙花
一のきん懐もうちきくるまの　建舟
なるかる蝶もうちきの袖を　残香
猪の牙みのけらる　茄子　岑有
園夏　結町の　お門さ　千里　怒風
けくくくくくさの牡丹の垣や　祐甫
一枝ちすけるき竹の雫　仙花
竹のうちや兜の蓋くきのうつ　嵐雪
きるくき人供の酒をうむ　文
戒めるあひて嫁せむ　利牛
金ふそまるくうてけ　
なを名ひくおきうを花知ぬ
けまハ酒をうきて

改て酒と名乃ばくめつうた　利牛
あるくの別墅ふるきるれ　墅は芭蕉

秋之部　名月　杜めにれつまちくの中ホ　月を数て時候の序をえら注

名月や見ぬ所もなく居ぬ歩き　北枝
名月や　樫　まハ後森の塵　去来
家男てうく見初る月歩み　荷兮
名月や淀次起ル　森　洒堂
松陰や　蛇　船揚く　江の月見　里東
ゆち夜の初月ひきまけ　利牛
家たかつ　ホ立もぎし　後の月　其角
ひきの行秋の月くめて見行る
望峯不盡筑波を　素龍
明くや不二見いるう渡の町

七夕

笹の葉く枕ぬやりし　其角
星合ふ　ゆえ　宣ふや　かやの緑　孤山
七夕や　ふりくくる天の川　嵐雪

盂蘭盆

とうきひくかけふ彩や　洒堂
踊くきうくく舟く　墅　李由
多方月深くくと門さ　北枝

朝顔　閉関

朝かほや昼ハ錠おろす門の垣　芭蕉

朝かほや日傭出て行跡の垣　利合

てしかなと朝かほをきる柳かな　湖春

秋虫

年よれハ聲もうろ〳〵きりぎりす　大津 智月

悔の人のさきゝなきりぎりすくす　丈艸

蟷螂か手しくんて落さるゝ秋に　ぜゞ 為有

こうろきや暑て迯る猪の上　孤丞

鹿

友鹿の啼を見かへる小鹿哉　車来

人のもとへゆくみちにて

鹿の角跡や硯の打ほ野　素行

旅行のとき

寝に臥やすりひかへる鹿の声　土芳

草花

宮様(?)砂の萩や家あるかぎの花　撫湲

花さきのこくちりや村さかめ　北壺

浪出乃萩や刈跡ハ稲の端　猿雖

芦の穂や白粉猶る萎かる　丈艸

ふるゝゝ袖にて

芦の穂よ心ゆるつる夕や露の猪　去来

山中にて茸狩を見て

茸狩や鼻乃先なる哥かるた　其角

園菊

菜畑おくれて菊のさかり代　松風

餅菓子を食て咲けり九日の菊　桃隣

秋植物

稗刈る背戸にもの干す家ところ　新牛

落栗や谷にながるゝ蟹の甲　祐甫

秋風や藤子の苗乃いろつゐて　木白

蕃椒午て宮ゑともかく猫の瓢　孤屋

さうかしの名を南蛮かしと云くるゝを、くるミを治世南くんふてひさしく道ゆく人の、赤はかりつきて天のそゝぎそくしくハらからなるをへるに、ためしやちらさきのゆく人の、目にあまめて伴ふあるべしとみやきし、かふぬ名目ハ汝らわかれ付のふへくなれハ、天資自然の趣きらく、眼を喜ハしむる、世をうつる地を萬木の中にわれて行掾の、ちつのかさにあらふ所の伎倆を忘すれハ、すくなきものつれそあぬけのつゝいに去られて、やねのくられ二階乃つま物かけのゆくを、たのめるかきをあやうくみる作らせ藻のもと、あきたくひのなんれくも思ひハ大かるへ

かげ(?)欲つ(?)蛟の手すらおよがしつれ
てよし(?)符(?)の日をうつさみなみと(?)
不全(?)子果乃とふ(?)ふ(?)と見とゞめ(?)きえしへ
やつこ(?)又(?)妓の此(?)もふの色を同じ(?)うて
栄花の頂上をせりかくれへ(?)ひまる人桃
めりその隔さきさまの花(?)うけ木(?)ふ
ある秋一雨くれてなんちにあつくと
ひとつみ(?)しをなやせしきゆるとえ
とやらかく(?)つ(?)あらしも(?)さし(?)今(?)
人ゝも出世をさりつれへい(?)よ(?)
ねの(?)むへふれろ(?)もみを(?)へるに(?)
小序をあつめ

石(?)あさ(?)経を根ざしや庵(?)の(?) 北枝

題しらず

お襟(?)えなふ(?)や 秋乃かりもき(?) 嵐雪
冬風呂のつや(?)家(?)の男の姿 丈艸
碁ひとりよさ(?)床(?)物の匂ひかな 洒堂
秋のくれのよくかくなる(?)かな 荷兮
草枕や芙蓉も見へ(?)秋(?)の(?) 利合
夕日の(?)けへ(?)秋寒(?)る 猿(?)かな 支考
人ゝ枝へ風(?)くて(?)もなかりけり 北枝
あき(?)風に(?)や(?)ひ(?)る(?)さ 池の上 依々
庵(?)丁乃(?)ほ(?)か(?)くし 月の雲 其角

冬之部

初冬

凩や沖よりさむき山のきれ 其角
市中や木の葉も落(?)ふし(?)庵 桃隣
冬枯乃畑を(?)貫(?)るごとくなり 芭蕉
桜木や狐張(?)まつる冬の月(?) 支梁
鉢の木の果の行(?)みや小松原 斜嶺
刈蕎麦の跡の寒(?)さや小家かな 柄実
風の萩よるまる小家がち 浅香
初霜や猫の毛も立寒(?)鳥(?) 楚舟
凩や照(?)あけ(?)さ 猫の面 八桑

南宮山に往て

木枯の根にもとる(?)付枝(?)かな 桃隣
笹(?)の(?)葉に霜乃 萩(?)の寒(?)さ(?)かな 游力

時雨

芋洗ふ腹へらしけり初時雨 荊口
黒くけり沖の時雨乃行ところ 丈艸
芭蕉翁の(?)霜(?)に(?)... 
あらぬかぬ今日は時雨よ(?)... 斜嶺
在明くず(?)れ(?)へ(?)... 許六
旅ねのあろ
小夜(?)更(?)ぬ... 
大根引... 北枝

[illegible]

芭蕉
飛波
洒堂

[illegible]

飛波
示撥
利牛

[illegible]

秋眉
里東

[illegible]

雪

[illegible]

飛波
利牛
買山
依之
猿雖

[illegible]

支考
小枝
仲六

[illegible]

炭賣の横町さびる　夕吹
海山の色の沖ふる　吹ふるる
沖の魚や曲尺ふまる雪の路

乙州
素牛

題不知

かすみさ玄狗よりはしぬ枯柴
[illegible]や粉糠の如る　臼の響
禅門の草庵袋ちろ[illegible]な村かく[illegible]
[illegible]火焼の[illegible]　杉の笠
白く[illegible]の[illegible]　[illegible]や　[illegible]
[illegible]の火や　[illegible]乃文[illegible]
庚申やこゝふ巨燈のあらぬ[illegible]
[illegible]　[illegible]組まんてさ[illegible]
海へ[illegible]　雪[illegible]　波の[illegible]
[illegible]

呂丸
芭蕉
許六
智月
之道
文中
残香
其角
仝

[illegible]

芭蕉
方乎
耽波
岚雪
智月

歳暮

[illegible]

杉風
李由
智月

猶ふさ乃けぶり〳〵よ年乃等
ゝ〳〵の秋ハ直さ〻ら民信小　孤屋
年乃くさ乗ふ志ゆき徒つゝ　猿蓑
芭蕉ゝうの秋ゝ乃ゆ乗りくまの中を　秋坡
いゝ〳〵ゝ年一芭ゝうゆふ
飛ゝて心やゝ〳〵ゆ年ゆ乗り　赤彩
乃年よ京ゝ乗ゝ乗ゝ乗ゝ状ひゝ　湖去

## 姚潛秋ゝ部

秋の空ゝ光上の杉ゝゝゝゝれゝ　其角
あゝ乗ゝて一羽海つゝる雁　孤屋
彩雲ふ貝備桜ゝ見ゆて　仝
月の隔ゝ四扇乃門　其角
祖父ゝ乗の光桶も落ゝ斗ゝ　仝
ゆゝゝ乗ゝ乗ゝハ九太ゝ乃ゝ　孤屋
下宗ふ宗法乃墨船ゝ乗ゝ　仝
坊ゝ乗ゝ乗ゝる簑ハ乗ゝ　其角
見ゆ乃ゆゝゝ乗ゝ乗ゝ　孤屋
息吹ゝ乗ゝ霧ゝ乱の針　其角
田の畔乃早苗把て挿て　孤屋
乗者乃ゝゝふ徧笠の第　其角

約燈の引出ゝ　孤屋
新ゝ乗ゝ乗ゝ　其角
給縄ふ魅のゝ　孤屋
居乃ゝゝ　其角
乗ゝの梅ハ桂乃花のゝ　孤屋
ひゝのゝ乗ゝ乗ゝ　其角
いゝふ跡ゝゝ金乃ゝ　仝
宮の徧乃いゝ　孤屋
文乗乗ゝ乗ゝ　其角
いゝゝゝ小傍いゝ　孤屋
年ゝ乗ゝ密拱乃ゝ　其角
常ゝゝゝ乗ゝ風ゝ　孤屋
君乗ねハゝ乗ゝ　其角
押ゝ乗ゝの　孤屋
辛ゝ乗ゝ雀乃ゝ　其角
小ゝ乗ゝ冷ゝ月乃雪ゝ　孤屋
紙燭ゝ乗ゝ乗ゝ　其角
上塗ゝ乗ゝ　孤屋
小西ゝ乗ゝ行ゝ　其角
けふもゝ乗ゝ　孤屋

孤屋新ゝ乗ゝ乗ゝ
今四百ゝ乗ゝ乗ゝ

其角　孤屋　各十六句

天野氏興行

みちくだり拾ひあつめて案山子かな　桃隣
どんどと水の落る秋風　野坡
入月に夜ハほんのりと打明て　利牛
塀の外まで桐のひろがる　桃隣
銅壺よりなまぬるゝくんでつき出　野坡
はよふ降る雨のつへやむ　利牛
ウ
瓜の花是からなんぼ手にかゝる　桃隣
近くに居れど長谷をまだ見ぬ　野坡
年よりし若きをめる侍ねぶり　利牛
いろ〳〵のきくは十月のやら　桃隣
台所けふハ奇麗にたち立て　野坡
かさまなかりく嫁の仕合　利牛
きんなかと細工を留る作右衛門　桃隣
鍬持さうりめとる夕月　野坡
時ならぬ念佛きこゆる盆の内　利牛
鴫まつ暑まきりてゆきかなり　桃隣
人の物負ねば楽な花盛　野坡
ゆもや添まも十文目とる　利牛



ヲ
より平の機に火桶ハくりまて　桃隣
むかひの奥ハおことされも見ヒ尺　野坡
買込で菜て男粋(ダテ)さまく　利牛
帰るけしき鐵さへ清く　桃隣
此度の薬ハきう〳〵杉が當　野坡
杉の木末に月かゝくと　利牛
同じより老の咄のおもしろくて　桃隣
久しさまて又新麦を侍　野坡
よれやうに番かたにさき立てる　利牛
おやうしんされハあそね高と　桃隣
桂子も肩にかゝらぬ暑さまて　野坡
名
京ハ趣別宗和念入　利牛
焼物に組合たる冨(トン)田彩　桃隣
隣を盗んで今日もねてる　利牛
髪立ハ雪駄ちらする四衆ぞ　野坡
先沖まてハ見送る入舟　桃隣
内でより菜ものなくても花の陰　利牛
ちつとも風のあらぬ長閑さ　野坡

神無月廿日深川にて所興

振賣の声あつまりなり歟子縁　芭蕉

降てはやまし時雨さう　利牛
雷遠ゝ　孤屋
小雨をしらねて
月をまつ山ゝ　利牛
好物の味を絶さぬ市さの風　野坡
剃髪の出き　芭蕉
網の着近津き　利牛
早さく　孤屋
二十八日
さゝらさら　芭蕉
淋し乳の雪又鞍殘もせぬ　野坡
明ちよむ山花　孤屋
挑灯を吹けして
肩癖ふる濱風の膏薬　利牛
上さきの千葉刈むもらんの　野坡
ふ出る月　芭蕉
内て寄する
御雲の七さゝを貸られて　利牛
塀ふ門わゝ　孤屋
十石
淋雲陳鬼も世捨月花　芭蕉
砂ふ腹のうゝ　野坡
青草
新鳥の羹もちゝ雪の上　孤屋
吹ゝふ上ゝる　利牛

川越の帯しめ直す　野坡
平地の雪のうすき　芭蕉
歌垣
丁物を　利牛
月向の方へ　孤屋
濱風の明方　芭蕉
笠寄ふ　野坡
又　孤屋
ゝさゝ人脇　芭蕉
笠筆は　利牛
ちの心　野坡
井よりて侍軍合の　孤屋
ゝ紙を　芭蕉
風やゝて秋の時分　利牛
鯉の口ゝの　孤屋
ちらはらと来の揚場の汐摩　芭蕉
図案まゝの　野坡
ゝもの花乃三月中旬　孤屋
梅雨の　利牛

芭蕉　野坡　孤屋　利牛
各九句

雲乃雲おもはこはみれハ尚寂し　杉風

目乃覚るまへ乃ちとせきの雲　孤屋

下　香を一ふ深くお覚て　芭蕉

あつさときゝ　大名乃　彼　子珊

見るあるる風もあり　桃隣

雲をかゝまて　ひろき　富地　利牛

ウ然　岩乃　悦きれる　杉丹丸　盛水

第あ〳〵らく　て　鶴翁　雲る　也彼

二三ふ　宿所　りゝふ門の　根　子珊

乃　茶物の　さる　干ゝ乃　沾圃

竹ふ波　ふ　船ふ　船へ　ふの　ふて　石菓

稲　ふ　者乃　一人　見　浦の　秋　杉風

ふお　者乃　一人　見　浦の　秋　也彼

ゆ　ふ風の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　利合

ゆ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　依〻

資中へ　の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　桃隣

第　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　子珊

川　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　石菓

名　彼　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　杉風

資戸へ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　盛水

物思ひ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　孤屋

先　集　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　名良

隣　葉　を　物　を　依　ゆ　ゆ　桃隣　依〻　沾圃

つ　き　〻　つ　ま　て　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　子珊

ま　ま　て　て　て　て　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　利牛

ま　て　て　て　て　て　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　杉風

ま　て　て　て　て　て　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　利合

ま　て　て　て　て　て　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　彼坡

ま　て　て　て　て　て　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　子珊

ま　て　て　て　て　て　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　利牛

ま　て　て　て　て　て　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　杉風

ま　て　て　て　て　て　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　桃隣

ま　て　て　て　て　て　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　盛水

杉風　九　野坡　三　孤屋　二　沾圃　一　芭蕉

石菓　二　子珊　五　利合　二　桃郷　四　依〻

利牛　三　岩良　二　盛水　三

撰者芭蕉門人

志太氏　野坡

小泉氏　孤屋

池田氏　利牛

尾張蓬左擅水堂主人　花ちるは葉を編て名を
米に乗せ人ありあるものを忘れ子なる
花の姿いかるふ記く世廊を旅宿とかりの日まを
あつめて名を花月とし水を枕とし雲を友とする
世あるやうにけ雲を友とし雲やとひの宿の千き物さくの
鏡は常日々に鏡のをのさまなく成る風情をきていさくち
雲をまきまちまものもいかれいうやいとのいとをとる
ひ雲をしおあるるなとうふさちて雅ゆりのたるもの
はをしひ雲の大空をとるれて手量のきまりなき
乃ふ之乃ちもあ人世むひ助乃ふ花野やさふれるへし

元禄二年　弥生　芭蕉　桃青

花三十句

よりあひそ

あるるく　とくろ　花ちるよりの
我まをいはをる　花ちるはるし
海晏うけさく　花乃さやし
花井ふこと　ふまで　ふよまむ
暮春し　花乃さ　ふ鬼瓦
山里ふ　陰の　きつる　花見ふ
行るを　花見る　人の長　刀
みふの　雲をう　ハ花もまるへし
春の中　ひそ　りて　ふるせるふ

負室　路通　信徳　晨凡　友五　尚白　去来　野水　亀河

ひくの　ひ雲　宿といれん　花の宿
花ふふ　ふわて　ふる　枝もか
見あけ　ふすら　なるぬ　花の鉢
兄弟乃　いろは　あけるとい　花のさき
ちるそれ　ハ酒　ぬと人　ふ
冷汁と　散て　もようや　花乃後
ちつ　ちるそ　詩ろ　傘をいまし
世界　船の　花咲　よけ　霄乃冊
ふる時　そなて　逃けり　花ぬ枝
ぬれふや　後分　ハふ　花の母
疱瘡の　孫まき　見ふる　花乃糸
行ふ　ふれや　風東　雲ふ花の時
花ふ　ふて　うつし　しくなる　ふる花
山行ひ　ふ花を　夕日ふ　見ふ
ふり　ふる　理屋　ハなし　ふ花の雲
ふりあひ　ふつ　花ふ　ふの物ふ
稲ふと　友選ひ　ふ　ふ花の心
花ふ　ふ　ふけ　ふ　ふ尾上ふ
貧ふして　ふ乃　ふ見よ　抱う
酒ふ　ふる　ふる人の　ふ
月花ふ　ふして　酒の心　ひ
行ふ人の　山家ふ　ふて
擅乃ふの　ふ　ふ　ふ

越人　一井　俊政　鼠単　舟泉　胡及　長虹　卜枝　鴎歩　荷兮　仝下　落芝　九竹　心苗　城人　北方　冬松　冬文　荷兮　芭蕉

杜宇 二十句

かくまきと成間てのふかき夜の月ひとりん はる
あの花の高雲の目ひとつ　季吟
月うち青葉山かくまくまくはるか　素堂
いそうきゆ不吹けの　初雪
憤短ひとりあくやかくまくまに　城人
おひしまのはるねするや　鶯も　松下
路や先　乱のゆくお辺の　時雨　主風
やうく雲はうまうくもむ　おれ廣き　物見
あうくのうまえ鶯旬せとうけれ
かくくまくんとうもかなき　鶯うれ　嵐雪
時ちきる　空かき　おやかくきて　旅原
物原　奥き　初見うう　何雪　一髪
三枝かと　路乃　おくやかくまて　仝

海辺

ほくく　雲は　十月もまやき　歌　鳥泉
麻くさや　麻入ら　姫先の　かくまに　香雨
わふかくや　今　鬼て　雪ひ　傘下
人ふかりや　力　ふまうまき　ほくまて　仝
ふと馬よえう　合　月の　初　鈍可

たくお　明ら　月　初　時　ら　れ　ふ　大雪　智月
うこかうこふくきくかな　ほくまも　李桃
うくうくうくうくうくき　初　時　市山
うくうくと　雪　月　鬼　ほくくあに

月 三十句

かくくと　笠　ら人　約　月　梅舌
歩　れ　も　月　見　中　の　猫　満水
屋　ひ　つ　ま　ひ　ち　の　今　雪　一雪
雨の月とこ　ま　の　居　ひ　分人
けうとまふ　わ　拾　く　月　碧　昌碧
至　ひ　う　の　雪　八　ま　き　月　の　新　雨柳
ば　く　け　ふ　ま　め　て　い　る　月　ま　な　一髪
こ　ま　ま　も　見　く　を　に　月　の　お　平　分　長虹
時　ま　て　現　抱　て　月　見　う　お　任他
一　ッ　歩　や　い　ら　ま　見　う　け　ら　の　月　亀泡
各　月　八　嵐　明　ら　き　ま　な　う　け　う　城人
各　月　や　ら　く　十　二　八　あ　う　な　ふ　文鱗
各　月　や　ら　ひ　つ　き　た　く　ば　の　く　船　昌弦
各　う　や　を　う　て　あ　う　く　筆　ま　中　仝下
各　月　や　戦　乃　考　と　犬　の　ま　な　二水
見　う　の　と　ま　や　て　人　の　月　見　分　北あ

各月の　ひ　ま　く　ま　ま　ま
ひ　う　く　と　月　を　見　る　月　八　ま　焼　ど　荷竹
い　う　の　月　も　跡　を　う　ま　れ　て　な　く　仝
各　月　や　海　も　お　も　い　ま　ふ　も　ま　す　衣来
各　月　や　や　や　と　や　ア　と　ふ　ま　ま　胡及
各　月　い　あ　ま　き　も　う　ま　ぬ　林　う　な　初雪
宵　に　見　く　拾　ま　ま　ひ　く　や　月　ば　ま　一髪

十三夜　新ふる秋こそ秋ぬ程見る月秋ぞ　杉風
朝日　暮いろふ月の色もかすき海の果　荷兮
二日　見る人も月のなさきを月の久し　芭蕉
三日　行る日のたさそ不も似と三日の月　卜枝
四日　夕月秋ひとんけしてあり〳〵ふむ　雪一
五日　行日も見さるめくるめ宵の月　泉
六日　浪川見雪ふころや月の光ら　蓼雀声
七日　能やこふきのてゆる月秋ぞ　篁一髪

雪二十句

雪の日や船頭のこ新乃色　其角
いさゆふ雪見ぬ人ハいまそ　芭蕉
竹の雪折て秋かゝ雀ろ秋　塵交
かさゆるや雪ふ世ひるふ只の山　京加生
車尻雪なきふ世ゆ〳〵ふ夕　カ
さろ雪ぬ見てろふ顔を洗ふ　小春
さろ雪ふ戸明ぬ間ぬ花ぬ　枝人
ふのうけのふふぬ雪の色人ハ　昌碧
人ふき秋ふ物ハ見ふ雪世　芭蕉
雪降て一ふ屋ふ雪ふ　二水
秋の雪おたふ雪ふ枝おん　鬼仙
ゆきの日や川筋ふ雪ふ　除風
初雪や行〳〵ふきふ雪ふ　暁汀
雪の汀乃大船ふ小ゆふ　芳川
雪ふ船ふ鮭ふ　冬文
雪ふ暮ぬきやけ　桂夕
ちふ〳〵や沙雪ふ　荷兮
さろ雪ふ先草ふ　路通
はふ〳〵ふ雪ふ見ぬ　其角
船ふけていふ雪ふ海の雪　芳川

歳旦

二月ふ上ぬふ世ふ　芭蕉
ふれ人ふ雪ふ　古梵
ワふや元千年ハ　風洛
雲ふ伊勢ふ家冥人ハ　其角
ふふ吾連歌ふ　文鱗
月雪ふふ雪ふ年ふ梅代　太来
ふふふふふ年ふ梅代　一晶
元日や行ふふ　路通
元日ハ明ふ梅ふ　一笑
歯固ふ一梅ふ　如行
ふふふふ社老ふハふ　篁
伊勢浦やふ雪ふ梅　蓬格
ふふふ雪ふ梅　龍門
太年のふふふ梅　昌碧
雪ふ竹子沢　元廣

小椎子 雪やひろそむまろのうと　舟泉
ら〜男子社樂をあるひけり　仝
山茶よう〜白まうる竈の煙　重五
松ゝる〜引ゝ泊つく年もとと　釣雪
月花乃初八琵琶の本とうかな　仝
連て来てゆかすハせひり万象楽　一井
うゝ白もゝゝちる神の玉ゑ小　胡及
見れやうゝむ春や彩玉の年の海　長虹
七夕と起て縄ふ〜かく柳小　嵐弾
さゝ姫やゝ乃の西ハいろゝん　仝
遊葉や舟の函のかんみを　端水
佛ゝう祈ゝ玉ゝ元ゝ乃のまゝ　朴什
の〜宮やゝ引ゝ春ゝ〜ハいろゝん　冬文
かさゝふとたゝ思ひさゝ乃ハ物　今下
正月の奥のかゝらや炭さゝゝ　冬松
七夕の春寂かゝさる用ゝ柳　柳風
ゆ〜〜ふ雪ゆき門元ゝ乃ゝや　防川
大根ハ去年乃青葉の白ハ小　昌勝
学の翌ゆまゝを年おゝゝ　夕乃
傘ゝ山茶花かゝゝ元方概　梅舌
祈ゝゝて松の葉ちまゝを乃ゝ去　北水
たゝ〜見む点ゝ乃ゝゝ大かゝみ　仝
曙ハまゝ乃初やたゝふゝら

初ゝ家や深ゝ乃乃梅の今のさゝ　城人
まゝまのめゝゝ元乃ゝゝ乃ゝ　仝
ちゝやゝゝ山階ゝ心ゝ乃ゝ　荷子
万歳ゝやゝを隣ゝ明ゝけゝ　仝
巳のゝゝやゝ〜ゝ去まゝ乃ゝ　仝
赤ハまゝ月ゝゝ乃ゝ　仝
我ゝ武ゝ宿ゝゝゝ乃ゝ　俤船齋
初まゝ　貞室

若葉つむ訪ゝ本紙割畑小　城人
特ゝ乃て梅ゝも見ゝ乃ゝ乃ゝ　俤俊似
七草をゝ元ゝゝ乃ゝて法ゝ乃小　カヾ
女ゝゝ〜ゝゝゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　小春
例ゝゝ〜枝乃ゝ乃ゝ乃ゝ残葉小　岐草維
春ゝゝものゝて女ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　素秋
石ゝゝ〜ゝゝゝ梅ゝゝ　元寮
寝ゝ居て打ゝゝ乃ゝ〜春乃紅　路歩
むゝゝの乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　城人
義ゝ乃ゝれゝゝゝゝゝゝ　梅梧
梅打てゝゝゝ乃ゝゝ　一髪
義ゝもなきゝゝゝゝゝ乃ゝ　冬松
みゝゝ〜と去ゝゝ乃ゝ梅ゝゝ　蕉笠

現代風ゝの息ゝ乃ゝ
毒の木ゝゝゝゝゝゝ梅ゝ乃　芭蕉

若風　去来　相笑

市柳　夢ゝ

梅舌　麈交

冬文　芭蕉

今下　路通

荷兮

舟泉

椿　今

春兩　今

接木

つきそめてこと兒のぬさ風ぐさ　舟泉

今下　荷兮

卜枝　湯水

嵐雪

白尾鷹

たゝかひの鷹はなれて白尾かな　野坡

絲の井ふ　まき兩かるる　十丈　奇生

立河ふ　毛草見さる　明石　亀助

まゝゝと　親子　枝けり　ばらゝし　舟泉

すゝゝとつゝやいはるや　其角

きゝゝと　栗ぬ　ふのをけり　古峯　蔗笠

土橋やよろよろ　ばらゝし　誠車

川ふや　夜叉の　くてつむつゝト　冬文

ばらゝし　須中　ゆふまるひろよ　青江

紫雲高於天池水殺生を禁せられ公事まるるなり

池ふ　殺生　ばらゝし　素堂

風の吹　方せ　うしろの　柳ゝ　御法　柳ゝ

何のもなりとも　ばらゝ　城人

さゝ柳　ゝ　ぬゝ　柳ふ　一笑

天ゝ　ゝ　ぬゝ　柳ふ　小春

すれ　ふ　ぬゝ　風ふ　一笑

見て　舟　代を　ゝ　昌碧

さゝれ　ゝ　鑿の　ゆゝ　柳ふ　杏雨

うゝて　頃　ふの　ゝ　やゝ　此橋

吹風ふ　年　ゝ　ゝ　ゝ　杏雨

吹風ゝ　鶯　ゝ　ゝ　ゝ　松芳

風ゝ　風ふ　ゝ　ゝ　柳ふ　校遊

仲春

荷ヶ仝　不悔長虹
素秋　今下
暗歩　清風
生林　去来
昌碧
城人
笑中
除風
一橋
一松
一髪
独水
除風
一雪
岱車
宗瀘

麦の葉よ菜の花やかる風ふ
菜の花や行菜の古よのあいな
なの花乃仲夏ふうつる日数
菜乃花共暗うちのこれなる
うつくしも花そそ物くの禁ふ
万歳を仕舞のそそ其田ふ
つまこさまそ打ふらるさふ
蜜蜂よ一本ノ極しさふ
きつくハ蕎子さふ揺ふ
ふ仕てくかくハ打ふる
うろうろ見ふ見ね迴の横ふ
さつくとふやくれんきつふ
なるかせふちくくふ雲花ふ
あのきふ寝てふ此辺のもく春ふ
こる松のみつをあかる結ふれ
ふかるも綸縄解て毋結ふ
ふとはらて去ヤ行ふる性ふ

蕗橋　城人　去来
落梧
杏下
一井
柳凡
梅鮒
炊玉
白歳

忠知
荷ヶ
秋水
角泉
暗歩
燈遊
杜国
大良式之
芭蕉
飛あ
卜枝

蕗の葉ふ行ふ春ふ
あつつきを知ふ蛙ふ
いくすふ月新ふ岸の
花ふんて去ふ
不関ふ花て後ふ春の
ひやふ乃庵徊ふ
ふ蜂を児の見ふ
撥掬の葉よ春ふ通ふ
かふふの中成生ふ
ひふふ若葉ふ
ふ

暮春

伯のふ乳も浦ふ
稲ふ
ふふふ乃ふ
ふふふ日ふ
草刈て草選ふ
ふ蝶の
麦畑ふ人見ふ
ふけやふ郷の月乃
ふふふふふ
雀鳴ふ山吹ふ
山吹と蝶乃ふ
一雨ふ山吹ふ

蛙ふ
去来
落梧
杏下
一井
柳凡
梅鮒
炊玉
白歳

忠知
荷ヶ
秋水
角泉
暗歩
燈遊
杜国
大良式之
芭蕉
飛あ
卜枝

蕗橋

とても咲きて 山吹のそくいろねに
あそふとも 物しり声ね 鶯に
さう草乃 露なき土ね雲雀鳴
いまきさとの 雨ね まつの 藤かな
蘂の露をきのまゆ乃 さくらかな
笋齢にて そこてきれさくつれかな
奈減て 何もきらいなや 宿の梅
角落て やすくも見ゆる 小鹿かな
なから清水 覗もの 滝の波千鳥
わやも その日 同し咲きや 桃の花
人まむ舟と 陸との 波千も花
山吹の花咲かねる 躑躅かれ
撫子や かさくて まろき葎の花
篝火ひて 岸のまとけぬ 鯵舟かな
永き日や 諸実 路も かまよねこ
永き日や 深み なかり よく〳〵青
わすれ草 咲て 嬉しや 紋鉢かな

仝
遠雨
去来
俊似
長之
長虹
嵐蘭
且藁
芭蕉
越人
今下
交重
荷兮
兼正
亀洞
卜枝
冬文
仝

初夏

まろもかくや 白きハ物ふるの絹
更衣 襟も折らすや たくくさに
ころもうへ 刀をさして 見えたれ
尚柏老人のもちらるひかしおしょう
香をとめてむけれ文鎮かなれる

路通
今下
嵐潭

うそ寒の頃 越人かもちあるを忘れ
ゆく帰るかへの此文鎮をかへらる
蕨野焼 香をもしろく 〔?〕 文
荷兮

山路にて
なかなかにても此花薬の 一つかる
松のうへハ わらくちらうん 枯葉
柳の木のいもそろる 若葉かな
切らふの つる葉かを見入れハ 梯に
若葉そふてらかなるのかなはに
わけもなく その木くの 若葉かな
ひかくとかなる葉かするた 胡蝶かな
ゆなかいる 若葉ふ見ふ行ゆく之かな
あけ坂や 下ゆくおれ 次わ橋
よけ丸りの 稲とて 麦一穂
枯野ハ まわろ 見へる 百合の花
麦わらそ 桑の木まろ おりけり
むきうふ志うく 田乃 蕪かな
あらら 旅の のふやなや 篠乃蕨あ
烏飛て あふな雲の 一葉かな
けし散く 車に実を 刈る麦ぞ
大粒な 雨よふるらし 茄子の花
蓑さわり 見る 拾ひぬ 茄子の花
深川乃庵にて
菴の夜を見つかたらぬすみれけ

荷兮
芭蕉
一井
越人
不交
仝
亀洞
竹洞
冬久
鈍可
玄寮
生林
作不知
鈍可
嵐蘭
落梧
李桃
東巡
吉次
嵐雪

きひしさのかほはおそれかゝる　野水

仲夏

霄やみの笹にうつるや螢かな　桜井 元輔
刈草の香に出てる竹の穴　一髪
窓かけて涼みもとめる月夜かな　不交
関きようもまきの呼螢かな　風笛
乃痩く道まゐ涼みかな　青紅
わかれ乃秋はやくもうらみかな　倉咕
草かりの袖よりうつる螢かな　卜枝
あはて涼る袖かな　鴫歩
ちりて葉室をとふハ春の比　秋芳
あかきの花や　いやめの菖蒲　小春
故のむれて梅の一本の日暮けり　李雨
かやり火は森ふせするくなりけり　二水
雨のくるゝ傘にくるゝ時雨ふ故ハ　一笑
故の痩て濯の上にとまりけり　胡及
藻の花さかりける澤の行衛かな　児竹
汲引て藻の花さかむ思ひかな　此橋
豆伸て脇百合見わたる夜かな　長虹
竹あみの縄さけてまゐりけり　去来
笋の時よりあつしちの竹　大津 尼
蚊をはらふくもなきの翁かな　一泷
あつし雨に柳まゐる行燈かな

あの比ハ小雀になりぬゆふ雨　尚白
みし晴ハ今にきかさき雨のあと　亀洞

岐阜にて

ねふりしをさましきてる鵜縄哉　貞室

同し所にて

おもしろうてやがてかなしき鵜舟哉　芭蕉

おなじく

鵜のつらに篝こぼれて憐なり　荷兮

おなじく

疲れてハ鮎も啼らん鵜飼舟　越人
先立ぬ鵜の親をまつ鵜舟哉　大垣 淳児
曲江は篝乃かげのくるふね哉　梅餌
鴨の巣の見えたりあるはかくれたり　路通
松笠の緑をこする夏野かな　卜枝
虹の根をうつす池中の礫かな　鈍可
蘭の花や涼みよくなく宵の雨　仝
垣ほや藤縫出人をうらむらん　越人
冷しさや灯火のくらき夜の窓　嵐蘭
夏の杖や夜光に藤の里　旦藁

唐崎にて

すゝみつき人ままならぬ夜の炭俵　其角
夕かほや秋はいろいろの瓢かな　芭蕉
夕がほの花に人の夜ねかな　野水

夕㒵は娘かゆかりのことさかな　備雪
山路きて又みえけるのなみかな　市柳
名は蔦ちまた夕かほ似て長し　長虹

暮夏

楠もろこくやうなり蝉の声　昌碧
夕立に千金ねるし植原ハ　今下
すゝしさは桜もやらぬ木陰かな　季濤
涼しさよ白雨なから入日影　去来
篠しく涼や窓のそら口　荷兮
雲の峰こゝろす不ふしむかなり　北水
まさき庭乃砂わつらぬ暑かな　荷兮
松の風乃人に宣なり夕すゞみ　如凡
飛石乃石にや草乃ゆかきを　俊似
味きゝや楼の下ゆく舟の声　仝
桃灯はとあやゆり涼し舟　卜技
きくしさやつもれて来るき河原　未学
咲ちりて見れよかり董ゝ出事　秀正
蓮みむ閑にさうなきこゝろくる声　ギフ晨凡
笠を葉て風なりし苣に誉めり　松坂古梵
江の骨よ見えもれて家のみえぬ　英水
まうくゆく清水に松の下葉かな　長虹
きゝきゝうて汲ての中乃清水哉　俊似
連はまき待せてむすふ清水かな　文瀾

引立てるふのまする涼みかな　涼月
かゝらむ八瀬大原の清水かな　尚白
虫の音をねられぬ縁に涼みかな　一髪
宿かりや暮をふるへい槐花　卜枝
麻の葉の皆ちゝまりて下る路　ギフ李晨
洵持草後ふ付らる谷の底　越人
鐘乃花ぬすまし蘭に似たるかな　素堂

初秋

ちからなや麻かくゆへの秋の風　越人
梧の葉やひとつふたつ桐の風　圓解

床の傍雲居のもとにて

一葉ちる音かしましきこすゑかな　仙花
さひしれちるむや秋の夕けき　方生
男くさき羽織を思ふ身のはハ　杏雨
わかれわかれ酒のみあふぬさうりハ　芭蕉
藻や植れけるの浅くくさき　文鑑
いさかひの宿さへ番も見えぬかく　荷兮

子を生けする宿のかへし胡桃のみになりて

初顔をそのこのゝやくるゝ今の　仝
濃なるのあさよの作まうつりける　吟歩
あさかほやひくゝの水にうつる月　胡及
見えよふ葉のは物のうへや窓の声　嵐弾
秋風やあふきの手に涼さらん　去来

清きは庭要よう洶鱸うな　昌長
畦ぬふ糸ものすれもいるとう乳　等汀
まろ山は通ふ路ふう時ふろ　一髪
きりぎりす地蛩消て時くけう　素狄
ひの乃雪は移ぬ成待ふ　芭蕉
いるつまやきの木は東けの八面　其角
ふまれてもなほうらや萩の花　舟泉
ひとろ〳〵と狸寄けや如ふれ　芭蕉
桐低るもちえきの蒲萄　作者不知
草ふろ〳〵かゝぬも茅ふれ　任口
のえきれと成の猫ふ　荷兮
約人や猫ふとあんむふ　胡及
宗祇法師ふ　素堂
谷もきぬ小草ぬ秋　俊似
ろりゝけ物ふ寝ふ　芭蕉

仲秋

かゞ殘ふ宮力ふ　小春
ぬく〳〵と行を見る秋ふ　音
谷川や黒袋ふ秋乃暮　今下
石松乃ふもも時けう社のくれ　卜枝
谷ぬれや梅雨ふ　一髪
庶のまふ　人の宮見る夕べふ　泉
田やて畑成独ふ　一髪

山賤ふ庶ふ　其角
あるふまへふ　東頌
ちふぬ人と物ふて見る　林谷
萩の中ふ行ぬ　越水
ふふい有く地ふ　宗和
りふ宿は旦ふ秋　北枝
ふ草庵ふ　越人
亂もせ行ふ　防川
素堂人まろて　舟笑
ふふの実ぬけつ　胡及
一文字ぬ芋の穂　暁髓
庵の床ふ吹ぬて　巴丈
ちふふて祝ふ長　昌碧
ぬふふも　越人
関ぬふ手ぬ　暁髓
さ秋ふ　孫兵
ふふぬ　其角
きぬふふて　芭蕉
いふふ　一笑
暮秋
なふふふく　
ちふ宮ぬ　
山路乃きく　
一ふや　

荻がら宝に結ねさる秋草ふるとせ
とて叢はなれる玉まきれくれ　其角
やまぶけのたきは見るや菊の花　仝
菊が旁調子くんや紫帽子　二水
けふまなうて菊作ふとなおひけり　十閣
かきくりて萬さく人や我の袂かな　芦
佛しさハ欅の実落す嵐かな　加生
残る紫ものくらほちれや袖の色
芦の穂やまねく方なる数哉　路通

初冬

ひらえつちのせぬのとどめる寒哉　湖春
京なる人ふ十つぅりけるを
一夜来て三井寺うく人初時雨　尚白
まのしぐれ行かぬ山茶花のあのタ　湍水
万句興行ふ
見知りあふ人のやどりの時雨哉　荷兮
人々待ちる自か
千鳥なおぞふたる見る河原哉　落梧
物かれの水際のとどまくれ哉　飲玉
渡し守たうり寒き河原哉　仐下
おかぶしふ二日の月のふきちるを　荷兮
一葉づつ柿の葉ふるそ成ふけり　一髪
本の葉焼佛き国哉　仝

枇杷の花人のますまく木陰哉　仝
菜乃花ハめのつかずに見さる哉　李晨
梨子の花あくれはぬれて拾拂ふ　野水
蓑虫のいつから見ゆるや帰り花　昌碧
麦まきて斉藤なかりし落葉哉　仝
のとけしやまのまく比の衣かへ　一井
縫ものをたゝみてひらる火燵哉　落梧
石臼乃破れておうしやつゝの花　胡及
青くともとくさハ冬の見物哉　文鱗
ひらしき鶏羅にかゝる蔦かな　卜枝
冬枯て風乃体をもなき野かな　泥雪
蓮池乃うちハ見ゆる枯葉哉　一髪
鷺居へて石けつまづく枯野哉　松芳
本のふし木吹とふまけり鷺の巾　杏雨
鷺杉乃路をひきぬる松葉哉　莣笠

寒月

梅爪出て夜く月て揃ふる雪　世水
ひき洗乃大根あらふ月夜哉　俊似

仲冬

ねろしめく待あひつなる霰哉　勝吉
あふ浪とつぎてたうる霰かな　辛治
揺ふまる霊あまりつ霰哉　林谷
家の戸を叩くるふやむあられ哉　李雨

いつくける葉を分せいあれば　宗之
第乃郭母くんの実のあれる　杜国
あ栩実葉の紫に見さる氷　勝吉
涼き池氷のときふ　覗きけり　俊似
ぼさハるそまつ葉をさう舞氷　涂風
おれるそ行をふあされあれば　夜舟

兼題　雪舟

俳より雪舟を京さられ　怪庵
ぬろ人ろと来るを舟ふ来るあれば　嵐蹄
我をもあそを舟ふ来るあれば　荷分
ろ色ろう雪舟引出れ　郭公
ち舟引や体ひも来ふ立てある　長虹
つけうへておろく　ち舟のふ来れ　一井
青海や羽白鳥鴨あく　ゆくら　乗洞
舟ふく　火ふ来ふ　ろる俳ゆる　炭
郭軒を見さもあるふん　友ふる　舎呫
井を来ふるめハ六月寒く　暮く　忠知
男ハ来深ふ　乗洞
村俊

汗出して答く　寒込む氷室ハ　冬松
海嵐猟の壷　埋められ氷室ハ　利重
炭竈の完ふさ　ふさ　蔭けり　亀洞
猛ふ成ぼめと　出るさもぼハ　怪庵
火とりして我見ふりぬ来桂　々一笑

いつこけ〜底起せハ来ぼき　亀洞
来ふ分りまさよりたん　ぼさら　芭蕉

歳暮

深つまや内ろも　れふ酒ふ　李下
吾ちてよりぬ　物ふ年ぼ　尚白
ゆちふの浦ハ　ぼけちぬへ　枇水
ろる迫く　鴨つ　ゆる菜畑ハ　亀洞
妹ちふハ　梅にさみる　瓢ふ　一髪

本雪ハ月見て来る人の来ふ来
称の実ひつれ　れふる年乃られき
うるハ　ふさふ　やせんとて
年乃人ま　柿の実ろ　荷分
門来をうつて　隆一　花ひ　内芳
田似ふ嵐迫ハ　来乃実ハ　亀洞

雑

年中行事十二月

供屠蘇　いとけ　ふ　ふ鳥居の来乃つ　次牙　荷分
散　ろ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
恵日寺　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
孝経　撤国寺　水田ろ　ち　ふ　ふ
灌仏　ふふの日や　つの　ふ法人　俳道
端午　れも　薄て　笑付る　髪薄し
旅来　うちけて　ふ　ふ　ふ
乞巧奠　いつ菓ろう　十夕菓を　ふ人　よき

弱迚
將軍
十月
文政
又名邦
遊冠

瓜髮も猿乃きくやあ母むろへ
草ゆ葉や呂乃　あきくるきくれ
動ゝきの衣ゝ人を　かあり花
乗那ふ　戦くひ　指を打まろ
おくれてや　服くさろ　鬼行而

詩題十六句

今日ふ紹浄斗會春風まあ一時来
泳ゐ　添あ母　あまくなる　まよ風
白氏落梅家澗水

あゐ母　ふ付くる　梅白
春来ゝ女伴閑遊ふ
花葉ふ留まゝ　ゝのまる　清ふ
花下ふ浮閑ゝ器
窠入ゐハゐめ　ゝきせよ　ゝ花の下
留春　春ふ留　春浮人　寂寞
行まゐ　おゝろ　人　白乃　妙守れ
寂風　欲　秋　長来　寒　漫来　数
緑　枝い　枝ゝ　数　風ふ　行　おろ
池　晩　蓮　芳　樹
笠ふ　香も　行　水　ゐゝる　ゝ風ゝ
暑月　貧家　延　有　零来　唯　賜　北　寒風
添ゐゝそ　ゐゐ　ゝきふけり　北の　ゝを
大底四時忠　拾　荒　中　断　腸　是　秋天

野水

雪　ゝ　張　ゝ　ゝ　ゝ

かけろふの抱つけそひつゝ　おろも小
　揚雲　雲半偏新藤覚花冠不整小堂来
　　昭陽人　小頭鞋履紫衣堂書伝器屑細雲
　　外人不真〻庭矣
　　西絶　宮中拾遺猫屑公行不載吾王足愛君
　　王昭君　植久　牡丹か
　　王昭君　小顔風流勝畫図　柳氏
　　一見留守さまるゆきくれぬ　約雪
　　庭やの数や山佛供燒火盃
　　桂堂生　仙乃　赤ら日数
　　濱釈の眠つゝ　ほくふ扇
　　あひのひよ蟲　ほくふ　踏
　　蟬乃まゝ武家乃　久舎
　　ゐ〻蔵や　鶯をまる　さね
　　所小ひつゝ生　ほくふ
　　庫弟出　上多　ほくふ
　　野多　鴨突の　長き
　　里蛍　枝なる　ほくふ
　　海異　ゐりろと　鶏引
　　川魚　秋の人　特所

辰
巳
午
未
申

山獣
桂夕
市山
一井
長虹
湍水
嵐渟
湍水
仝
桐水
児竹
舎咕
仝
舎咕
仝

牛馬四足是謂天落馬首穿牛鼻
是謂人

一方八梅咲　桃の　縋　越人
　藏舟於壑藏山於澤猶之固矣而
　夜半有力者負之而走
　ゐ〻ちゝ師走乃市ふうさん
　役聖棄知大盗乃止
　七夕　物ゐ　踏
　ちゝ　ゐ　ゐ　ゐ
　鏡臭　八花　市山
　絶著尊　鶏頭乃　雪ふ　一井
　藤房　ゐ〻き　ゐ　長虹
　師直　ゐ〻ゐ　ゐ　前
　一休　ゐ〻ゐ　ゐ　湍水
　汁鼎　ゐ　ゐ　ゐ　嵐渟
　山岩　ゐ　ゐ　ゐ　湍水
　海岩　ゐ　ゐ　ゐ　仝

　　各所
　八重　ゐ　ゐ　ゐ　杜国
　ゐ〻　ゐ　ゐ　ゐ　荷兮
　ゐ〻　ゐ　ゐ　ゐ　芭蕉
　ゐ〻　ゐ　ゐ　ゐ　湍水
　ゐ〻　ゐ　ゐ　ゐ　荷兮
　　雅　琶　楼　眺　亞
　ゐ〻　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　舎咕

関ヲ入て寂モ岩ニしみ入る蟬の声　宗祇師

寂寞ヲ関ヲ入て山寺の蟬の
鳴くるを見て作る　ゆかしや

芳野出て布子売とし　文衣
麦うつや内外もなき志賀の里　杜国
五月雨ふかく見ぬのやゆかしの橋　重五
朧乃　丸さきう　けり　みイり　雨　芭蕉
牛もなく　夏河乃　ひかりの　みるる　去来
角田川ヲて　一髪

いきの松　浜際の鮫　今ゆく
みよ　ゆ　ハ　ゆ　ヲ　秋　ゆ　貝　ま　ル　貞室
いさよひも　ま　さ　ル　の　ル　ル　彼笠
夕月や　杖ヲ　ふ　ふ　ヲ　用　川　芭蕉
九月十三歌　越人

唐士に富士に　ハけふの月　素堂
明　実の　ゆ　ヲ　ル　ル　ル

さしあふぎ人にむすびて
文級乃 月ハ二人の見る色乃 荷分
旅人旅立けるうしいなて糸とうしなる
月ふぬ 級元 はあよ 丁のこ人 曲水
わくらは乃 わくらはもつ秋 秋のいか 芭蕉
旅乃巣のこしもちりぬ 路通
狩衣 桶ふ 庵をあ開けて秋の山 村分
らあうう 稿まうう高もうけり 京 ちね
入月ふ人ゆ志りしぬるる ふ 玄察
鮭きけハ 親舟こうのきぬる ふ 一井
品川ゆて人ふまうくこて
海鹿の 墓をこうるの秋の景 文鱗
草枕犬も志こうる疲るの愛 芭蕉
旅ゆれぬ刀こうこうや 村ゆくれ 常秀
乃海ゆ苔其ゆ苔ふ
いく蔭家それゆ仲もやこう孚 荷分
夢ふ見し羽織い綿の入ゆう 曲水
其角ふこうこ時
ひく ゆ門てひこうこうるあの宿 荷分
天狗てこられあそ 世乃 蓋 文人
かく尾のこふ見ふ ちくふ 今下

里人のこうこうゆ ちくふ乃 ゆ 宗因
旅人と言葉の紅こて
蜜られと二人 蓋 ゆ きこの
旅屋して見しや 世乃 蜂 芭蕉
述懐
筆屋を捨て ゆ時 公
きゆら時ハ氷もきえて ちこ
み成 猫こ守りて田を手 路通
余石乃田黒 蛙入ゆも 蓋世ふ 枝宣
こう野ゆて 蓋 枝
芝ふ花ふこうふき 狐けう栗の院 杜国
さんふ見て汐あこうる 先金ふ 梅舌
こう秋ゆて
父母ゆ志きこうふ 蓋 蛙の 芭蕉
ひゆ先さ汐彩さ人このつて ふ 荷分
さこうふ入 湯をの こ 公
一本乃 なすひも ひあ 信 ふ 杏雨
肩衣ハ 猫ゆて ゆ世 の文 杉風
似こうや 白髪こうく 麻 愛 亀洞
ゆ月十日 蓋ふ の高ゆて
ゆくれ家 ゆ世家の中ふ 菊 嵐雪
うこ家を 貪こうきくの 恒不ふ 暁梧
人乃 蓋をこうねて

されハこそ　ひとつ　ひとつ　ひとつ

いのちの迫る事に
ものゝ人ゝかゝるべく消る命なる
ある人まゝにあられぬる時や
なるべきかの小氏と見ゆるちまゝ
世をさまく妻のゝまゝ
あるべき月の桐の一葉と思ふ人〻

辞世

何つまとなく燈籠の一ツ主コ林
みゐおくまけるに
仏さ頼のあゝ出てゝん一躍り
一原野ふそ
きく雪や小町ゝかれの見るさま
妻の迫る事
ゝゝ形〻〻ゝ
生ゝ妻のゝまゝ
稲ゝまさやゝゝひえゆく北の色
ユ夜身まゝゝ後
拙の人の鼾さ人なゝ秋の雲
毋ゐおくまけるゐの表
おきゝみゐやゝゝ今ゝゐ秋の雲
なる人の迫る事り
埋ゝ火もきゝやゝゝの京ゝ
旅ゐて身まゝゝける人を

京 去来
荷兮
野水
落梧
汐宮
自悦
去来
其角
尚白
芭蕉

あゝ書のゝゝゝゝゝゝゝ
鳥辺野のゝゝゝ金伴長の月

釈教
伊勢にて

神
頃やれのゝゝけ
頁てゝゝ毋ゝゝけ

西行上人の百累忌
ゝゝゝゝゝゝ

杉風
連翹や千年見し
うゝ貴ゐ鶯の巣
木屋ゝく傷もゝけ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゐ酒傷ゝ

自言ゝゝの人辰の巣
東照宮の別當傷長の
大師迂生
ゝ前ゝゝ

序品のゝゝ

ゝゝゝゝゝゝ
女房の稚園ゝと賞ゝ
暗き所ゐゝ
ゝゝゝゝゝゝ

芭蕉
尚白
小春
胡及
松芳
杜国
冬松
其角
越人

[illegible]くと落る涙や夏ひの[illegible]　仝
親まる魚尾上の蝶咲えけり　俊代
古寺やつるさぬうねの草草　一井

八鳴亭

海士の家聖とよびむ征牛　千閣
咲さけり寺めぐる寺の紅牡丹　一井
夏山や本流くの江湖彩色　蕪葉

奈良にて

法仏の目ふ牛れ麻の麻の衣　芭蕉
法佛の手須清くあらくさね　尚白

今年秋

腰の折ふき独り長ぶうの山ふ　一雪
無ふ来て庵一日の清ふ　一笑

十如是

ふのふのなるまて通るあらふ　荷兮

即身即佛

夏法の夏蟬八やんの佛ふ　愚益
ふちろひや得の線を文衣　菊弾
ふちろくや門のあつ法蟬　荷兮
ふのけのひをるむのさよ　探九
石菖蒲ふ旅隠鬼の相のふれふ　文里
絶ふ舟トろ須をも向ろ　亀仙
たふのふろろふふまくる世間ふ　卜枝

[illegible]侍ろ　狂見さてん　雪の法　約雪

平等法一切

物ふこくふ行人をやらけり　俊似
稲妻ふ大仏　ろむ　路丁
恒越ふ引ろ寺　くをふ　卜枝
ある人四時ろ食物ろ　ふ
物を不食不図ふ　を感て
ろをふふ

願ふふれ仏ふのふへぬて　荷兮

ある寺の奥行ふ

蘭も　ろ寺ろ敷ふうて　其角
ふみ出て方を行ふ月の舟　一井
法ろふふ法絵をふは師ふ　卜枝
人のふふふあてふちふをけふ

ふふくれをふ

夜ふて又ふふふふ一時雨　菊弾
鉢食の安国論ふふ
ふふふふの法や直ふ氷ふん　越人

古寺の雪

瞬や仏蓋くの　雪見　巴ひ　義兮

円

雪れや かふ二王ろ　侵椀　俊似
ふふふ法て法ふふ　一井

[illegible]

[illegible]

[illegible]

千代の松ふるひふるしこそ米　日

先祝へ　梅を　ゆの　みこそり　芭蕉

嘯風集貞享

[illegible]

夏なりとも氷れる舞ふかれば居なん　素堂

去乃文人のゆめはつかそぞろけく机紙
三人ひとりさき幾度もそして　北水
ふ紙さしのまくろ　荷兮
橋兵衛も去るろ　越人
の書りなるおとし　水
門乃石月待　関乃やきとひ　人
風乃月利を　初秋　兮
弐士の　雲　水
去をりふついて　海の　人
貸ようゆるう　出て　草の　兮
はふと隠るまて　むら　雨　人
立ちの　雪羽　雪きる　乃鬼綿　水
千日ひとあむ　北山のて　人
晩　きるとト　一宣　樽も　俳　兮
ひてともなき　久月　歌　人
露乃　鼠も　流の　やうなる　物異　兮
秋をなを　ゆく　浦人の　妻　人
明るゆう　雨も　来も　猪　兮
きふうかうる　利根の　川　水
冬乃　月せて　り　て　雪　人
源みう　行と　河　鐵　うち　兮　水

ふりくときの　の市　橋　兮
狐　ぼきしゆく　乃　見　ん　人
梅本乃　時　も　の　頃　せ　水
さくやく　夏乃　み　ゆ　る　人
月の　新よう　命　け　け　兮
秋　なるよう　里　け　酒　桶　水
雪　くは　歩　雨　て　人
時　と　去　ふ　不　彼乃　兮
かり　ある　詩　と　涙　ほし　水
史　著乃　て　ね　て　共　つき　人
かく　代　の　月　て　人　の　兮
み　せ　代　て　池　の　人　水
行　さう　新　も　い　て　空　と　人
捨て　其　ふる　奇　物　性　なう　兮
置　て　ん　八　正　月　て　ふう　手　れて　水
大根　ぎ　て　干　ふ　いそ　ぎし　兮

遠浦や沼よりちかき　亀洞
たるの舟乃ふ　酒のなる雲
のとけ〳〵や　早き海人の　荷兮
百里乃　懼る　菜くさ花　けり　昌碧
夕月乃　雲の白きをうち　緑　舟泉
歌宵乃　簑を　紙　引きぬ　絢雪
鮫の　羽　ともも　ちらぬ　不　家
一　紋　ろ　て　こ　も　古　家　亀洞
遊の　ま　ふ　ま　暮　ら　宜　緑　麻　荷兮
楽　ま　る　酒　と　ま　り　ふ　年　栄　昌碧
い　ろ　く　と　も　な　て　や　ま　ふ　嶽　造　絢雪
湯　殿　ま　の　り　乃　う　ま　む　ら　乃　舟泉
浮　や　と　延　の　て　く　る　川　上　雪　秋水
あ　ふ　き　れ　や　　ま　る　月　荷兮
秋　風　く　女　車　乃　鏡　お　く　こ　亀洞
神　て　霧　け　き　深　藤　乃　汁　輪　絢雪
時　く　ま　り　の　き　人　ふ　ね　た　の　き　昌碧
八　宝　山　皆　八　ま　ま　も　な　る　く　し　秋水
日　の　ま　や　け　の　八　け　ま　ん　曙　ふ　舟泉
ぶ　や　ま　け　ふ　士　り　ま　ふ　な　り　亀洞
向　ま　て　寒　や　る　ま　の　ふ　ま　ま　て　荷兮
垢　鮮　く　人　の　美　ま　の　く　書　昌碧

邸所　て　て　奥　の　蔵　賞　て　向　て　絢雪
ま　ま　ま　ま　ま　る　鮮　れ　ま　ま　く　舟泉
む　く　延　オ　物　の　び　ま　け　て　赤　雖　秋水
門　ま　る　ま　り　　か　る　　ま　む　荷兮
い　ま　ま　て　見　保　町　乃　萩　保　し　亀洞
れ　り　び　遊　ま　う　　と　も　た　の　流　絢雪
雪　も　ま　ま　る　ま　う　乃　や　た　の　月　昌碧
や　ま　う　秋　乃　や　く　ま　ま　ま　う　な　る　秋水
つ　ま　く　ま　れ　や　ま　ま　る　寒　の　家　舟泉
み　ま　オ　た　の　き　安　房　け　ふ　陵　亀洞
夏　の　月　や　見　る　ま　ふ　深　乃　照　ま　て　荷兮
桶　の　む　つ　と　を　入　し　ま　れ　け　り　昌碧
人　か　く　ま　ふ　服　る　ま　さ　し　て　た　ま　り　絢雪
つ　い　る　ま　人　り　ふ　最　る　粧　る　ま　　秋水

美しき鶯ときけうまきけり　舟泉

柳のうれに　うまきうの卯　杏芳

夕霞深物うそ久しん　冬文

雪ふるこえやうゝ月見ゆる　荷分

秋草のさてもなかなかさく咲くこれ　松芳

乃ひきゆくる勝　お穢とそ　舟泉

けものも又の捨ぶるうちぬる　荷分

あまゝ砂の中に　木のもし　冬文

火嵐の皮の　哀を弱きく　舟泉

涙見せ〜ところ　笑ひ　松芳

言ふより　端ゝ〜を　冬文

河に　ゆふ眼めちて　荷分

幾年幾順待も世に　松芳

よまそ双紙の　後を先ふ見る　舟泉

なふるものもうちもあるうる花の夢　荷分

月の嶺や　飛鳥井　乃　冬文

灯ふ　紙あひ　まの見　舟泉

数珠　うけて　眼鼻　松芳

陰遊も入歯ふ　蒔の　冬文

十月のきゝ乃　打きゝ　荷分

山里乃　秋ふゝ〜〜　生翁　松芳

長持ふて　かゝる　やく　さむ　舟泉

きふゝとなるを　濡る月の　荷分

るのさとれハ　ういゝく　冬文

さゝさ　番井　宮乃　舟泉

越ふまて　ひふつ　松芳

濡りゝ　緑　身の　冬文

曉ふゝく　提婆　品　ようむ　荷分

けしの花　ふちふ　松芳

味噌　まる　乃　舟泉

黄氏貫乃　門　荷分

沈朱ゝふ　ひゝゝふ　冬文

春乃初　赤見　舟泉

頼見ふ　ゆふ　松芳

きさゝきや　器布　冬文

そふかりうき　山に乃　家　荷分

ほくまれ待ぬあろのわもの　荷兮
酒のあるあるあるあるあるあ　戸出口　耶水
引ぎそそ〳〵車八幡宮乃うぶすな　荷兮
いのゝさるなくも人乃かゝらひ　荷兮
月乃秋落のあるきふいろくく　荷兮
一花わるいしあのきふけ　耶水
初ゆふしまるせの窓の竹る舟　水
葉畑ふ和茶とよそうみさう　荷兮
土肥を多くふうきとぶく　荷兮
市物あるれ神そうのうき　水
通路虫ついすうあけて遊ぶう　荷兮
六位ふあるし悪乃うふきき　荷兮
代素うさやうと清あひて　荷兮
銭一貫よ　鰹　一第　荷兮
月の初常陸きふいそらん　水
起咲けるし　公　まめ　荷兮
天仙藝ふ冷倉ゆるしまは墨　荷兮
ゆけうねうけよ看経の中　荷兮
なく人ゆなうそゆあれうちこう　荷兮
夕はゝしき　酒いつて　やる　荷兮

弱のやと眠見位濃けゝハ甲斐　水
秋のゆゝしふ　昔　浄福　陰　荷兮
生そそくもよくれふけゝ生見魂　水
八日の月は　すきやいるまて　荷兮
山乃端ふ　松く猫あ　荷兮
きつきあくあくくくとき紅　荷兮
暑き日や　寝うけそそう　荷兮
古敷さ紅ふ　懸み　の　荷兮
あろくゝ深ら　赤伊の草枕　荷兮
乱ふそのよきゝ　舞あかうら　荷兮
恩ふとも　あくぬ　頼あて一二達　荷兮
庵をつけて　行居うりぬ　荷兮
之方の殺ろうをゆ　荷兮
供きの草鞋を　人ふ　荷兮
隠くや　小橋大原　浅瀬の花　荷兮
人あひく行　すると乃　川畳　荷兮

月さし　のやうけしき　是乃　暑もなく　涼
おりうさふ　柄をさしくくハうき　関屋
家鐵は　所乃　匂をすゝ　出とふ　文乃
秋乃　庭やいとあをを　十　仁も　やまゝ　つゝ　蛍
月ふ　柄をさし　あくくハうと　花　関ふ
奴乃　おくくをう　百　の　歩　ゆく　紙　城　人
ふくくを　清　こ　ふ　ん　て　ふ　ん　今　下
おすゝ　ふ　ま　風　ふ　き　の　そ　う
真木　柱　つ　く　ま　く　て　う　か　う
仗乃　ゆ　ふ　ふ　返　の　ま　ま　ま
ひ　ま　れ　と　柄　乃　ま　を　遊　る　柄　ふ
ら　く　ま　く　う　ま　て　ひ　や　う　く　け　う
ま　ま　く　や　う　ま　ま　ま　ま　ま　て　ま　ま　是
ま　く　ま　ま　け　ふ　ま　く　ま　ま　ま　ま　ま　ま
大勢の人　は　舞　城　ま　ま　れ　て
月の　ふ　泊　飛　縄　う
陰ふ　柄　も　文　陰　ふ　柿　も　蕊　ま
秋乃　け　く　ま　乃　畑　見　う　客
う　ま　ま　ふ　い　う　う　世　を　肖　く　き
霞　ま　く　ま　く　文　宮　の　ゆ　む　戸
粒乃　雲　ふ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

人　全　人　全　全　人　全　下　全　全　人　全　下　全　全　人　全　下　全　全　人　全　下　全

是ものく　粉乃　おそき　まう　用
うち　舞て　浦の　宮　金の　泊　是
内へ　ものて　な　て　かな　を　ゆう　犬
碎　き　を　乃　あ　ま　ま　ま　ま　た　は　れ　や
ふく　ま　門　う　な　る　兩　乃　ふ　ま　ま
欲　合　猶　古　漢　員　ま　ま　ま　ま　ま
ま　く　献　ま　乃　み　ま　ち　ひ　け　う
知　春　の　津　ま　れ　り　て　押　く　く
白　き　ま　て　ま　ハ　き　う　く　た　ま　ふ
ふ　く　風　ま　ま　乃　ま　ま　ま　ま　ま　ま　く　と
中　ハ　ま　ハ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　月　ま　る　ま　の　杜　ま　ま　ま　ま　ま
人　ま　清　ま　ハ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　き　ハ　く　く　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
干　ま　ま　ま　乃　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　く　く　と　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
百　ま　ま　ま　く　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
田　楽　き　れ　て　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

人　下　人　下　人　下　人　全　下　全　全　人　全　下　全　全　人　全　下　全　全　人　下　人

海門乃秋

月かねも あらうふゆの八つ半や　越人

海あをあをふ　ふの比の　月　芭蕉

波ゝゝ　清窓　秋乃夕くれ　仝

月をさそはれる　秋　越人

黙草乃大きさ又石もうし　仝

風ふうるまて　浮ゝ　市人　芭蕉

なふふあくも　長安に見名利の地　仝

医の　あわきおそ目くすりけれ　越人

いそうゝと　時雨の空ふ　立ぬて　芭蕉

乱くう　世清やく　寺の鐘くう　越人

仏里ふ　古き　さ　蕃ち名きつゝ　芭蕉

豆腐ゝきぬ　雨のいけわ乃　越人

きぬくやいなかくなてゝふ　芭蕉

風ふきくあゝ　浮ゝうつくし　越人

ゝもつゝに　ゝ藤もすつゝぬ　芭蕉

物いそくさに　舟路なりけり　越人

月ゝに比ゝ乃ゝ　根を北うして　芭蕉

雲出ゝ　ゝつるゝ　ゝ乃　肌　ぬき　越人

破ゝ　ゝ乃　行ゝち付ゝ　ゝ乃　末　仝

見世ふ　ゝひゝき　麦乃　ゝ　芭蕉

家なゝて　段ゝ　ゝつむ十寸　芭蕉

ゝの　ゝ　ゝ居る　ゝの物ゝひ　人

人ゝて　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人

初　ゝ　ゝ　ゝる　堂乃　戸　人

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　芭蕉

頃　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　芭蕉

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人

あの　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　芭蕉

行月の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人

ゝも　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　芭蕉

秋の田　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　芭蕉

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　芭蕉

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　人

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　芭蕉

翁ハ俳諧のいれて来る人のめつらしさに
爲ぶるて其のかたより文や天満宮
之称さの月見雲なりけり　其角
菊花の窟ハ窟を引つて
咲てゐまるく　栗ハあハなる
詠く其て　猿こかける　夜ゑ
蓋きまうきうへあつきあう　孫人
恨くさる　涙まふさふ宮まて　人
辭に恥て　義を　まく　角
空惜の　鼠の如のなろしき　人
あくなりける　金二万両　人
いとあきをの　他人にも分ろう　人
爲けとる　てつてつてつてつてつてる　角
河熟き　耳ハつきあるさ　人
魚をも　ぼらぬ　月の江の舟　人
其ゆいろの　富士ろ　蔵茶ハ　人
いたとさ　ゐる　草の　一瓶　角
慢　行きうハ　こ　ハまる　人
うき　ハ　つけて　人ハ　人
西まゆ　東方　親も　ほる　人見　人
ようゐ　嬰　の　ゐ　のこ　きく　人
ひちたゐ　ゐ　ハ　ゐ　ゐ　ゐ

初雪やあしのびるる桐の朱ふ　野水
月のみしきぬ名残　落梧
山川や秋の嶮あらきさびしん
賤を家ろ〻見るくろけう　丈水
あるのふさ角　神谷月の草ふに
ひらこしくし長　堀の萩　秋の雨
川越の岩ふさまに　秋の雨
ねふとのうる　頼乃きさあき
ろ世をきろかく　孫の下
すろきあろふ頃乃うきこひ
更る夜の湯ハ冷うとみ暗て
あそくり　起もれ後乃　得
峯の雲ひちみひろをみ
旅をるうちの　公害　麗さ
京さみるみまのこみ　一文ふ
下戸ハ皆いく　月のおろけ
耳や歯やよそも　蔡の粥すに
昌豆ぬさせふけふの　初午
いろやふも　雪　ぬ　此あくふ
山伏位て　人ろ〻　なろ
くらくとくきひぬけろ茶車

梧　水　梧　梧　梧

一里乃 炭売ハ 冬の花 一井
うまひの 先の 籠 冰る 水 嵐渓
さゝくさや 西本を引ふ 清水 胡及
宿衣 たつき 深ふ ふ人 長虹
夕月の入きゝ 田早き 塘き ハ 嵐渓
ゑのゝふ 鄙を 洗ゝ 秋 一井
里添く 頭 者の 二三日 長虹
宮司の 妻ふ わ ら 夏 胡及
岡ハ 見 ても 侯ふ の 言ふき
茶 ゝ ゝ て 切ゝく 文 一井
う ゝく 寒起 ふ 湯 嵐渓
宮ゆく 歌宋の 越の 書 胡及
ふ ゆ ゝ ゝ 嵐渓 長虹
拾ふ ハ みる 女中 一井
浦風ふ 脛 吹 月添し 長虹
みゝも 加 き 紀伊の 胡及
若着 き 矢射て 長 一井
蒜 ゝ ふ 香ふ き ゝ け 嵐渓
ゝ の ゝ れ ゝ き ゝ を 胡及

蕨 ふ乃 徒の 裾ふ 落付く 長虹
ゝ の ゝ ゝ 肉も さの ゝ 義 嵐渓
望 安 ゝ ゝ 松 を 汐け ゝ 一井
本 き ゝ ふ ゝ ゝ し 松の 枝 長虹
秤ふ ゝ 人 ゝ く 乃 奥 胡及
ふ 羊ふ ゝ ゝ て 灸の 跡 一井
ゝ ゝ も 甚ふ 洗い 深 入月 嵐渓
ゝ て 陳 ゝ の 陰 ゝ 紀 胡及
あ き ゝ ゝ ふ ゝ む 萩 長虹
ふ ゝ 後 入 の 官 ゝ ふ 嵐渓
長 引 ふ 人の 呈 一井
毒 ゝ ゝ 瓜 一 ゝ れ も 咎 長虹
片 風 ゝ ゝ て ゝ ゝ 白 酒 胡及
板 ゝ き て 跡 所 ゝ き 庭の内 一井
ゝ れ の ね け ゝ る 蕎き 唐 丸 嵐渓
ぬ り く ゝ 日 豆 の 智 長虹
ア ゝ ゝ ゝ ゝ ハ ゝ ゝ て し ん 胡及

我もう〜新酒八人の碑やとた　嵐雪
秋うそ寒〜　いかも湯豆腐　越
月の宿　素欲引ちぶ宿ふねで
外面菜の　一茅とけふ　紅
されあひて牧ふ〜ら田もの三
門越くるは八　城下のみち
疱瘡の透直るか蕾の鬼　雪
唱寺八紅ゝに　蒔ふそりやる　人
なるこ見るそ　ゆるれくのうき雪ふ　雪
後そひ　よんとはいへるそうかき　人
七夕ゝうも　雲あけまるむ手た　越
行燈なそう　人形　浪人　人
笑物を　ゆうてゆく一ッ　祝　嵐
明　貝　髪そる　雪ち月彩　雪
ちゝ　青の　雛さ　注ある　女客　人
つまかの　医者ち　接　姿せ　雪
ちゝ彩ふ　貝ゝ　ゆるれも　長　越
ちゝ　嵐ふ　行を　いゝん　人

右半歌仙

そ仏そのの〜ゝ〜ゝ〜ゝ

平安　諸仙堂藏

弘化四年丁未歳発

東都書林　須原屋茂兵衛

皇都書林　勝村治右衛門
筒井庄兵衛
野田治兵衛
浦井五一郎

三都書林

東京日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同通三丁目　山城屋佐兵衛
両国横山町三丁目　和泉屋金右衛門
同三丁目　出雲寺万次郎
芝神明前　岡田屋嘉七
同所　和泉屋吉兵衛
本石町十軒店角　梅屋喜兵衛
京都三条通升屋町　出雲寺文次郎
寺町通綾小路下ル町　丹後屋徳次郎
大坂心斎橋通備後町角　近江屋平助
同通南久太郎町北入　河内屋徳兵衛
同通南久宝寺町ヒガシ　伊丹屋善兵衛蔵板